

## 第5回ズーム三水会報告「ミャンマー軍事クーデターの行方」

2021年11月17日4時～6時

発表者 岡本好廣様

司会当番・斎藤嘉璋様

参加者（敬称略）

村沢澄子 大多和 巖 富沢 賢 丸山 茂樹 岩垂 弘 小関 栄 小寺 隆三

杉本茂樹 石塚 秀 野口幹夫

生協活動を通じてミャンマーに2度訪問され、昨年はロヒンギャ問題を三水会でお話しいただきました。今回は今年2月に起きた3度目のクーデターについて詳しく分析報告いただきました。

軍の狙いは既得権益の維持にある。国民の抵抗にもかかわらず事態は悪化している。国際的な支援が必要であるが、中国 ロシアは軍との関係に近く、安保理でも足並みがそろわず動けないでいる。日本政府も態度を明らかにしていない。とのことでした。

詳細は報告書を添付します。

質疑応答も活発に行われました。

その一つは、ミャンマー国軍は独立解放戦の中で人民義勇軍として生まれ、ミャンマー的社会主義を堅持しようとしている。グローバリズム資本主義の自由主義者に対して戦っているのだとみれば、軍はクーデターで民主主義を覆す悪ものたちとの見方は単純すぎるかもしれない。近隣各国が内政不干渉を言うのもその複雑な事情を物語っているのではないか。との意見でした。

ズーム録画記録を参考までに添付します。上下2つに分かれています。

<https://youtu.be/QrrKZ0N6bMY>

<https://youtu.be/W6AP9WGArDo>

なおこの会は三水会通算第500回にあたり、それを記念した岡本様の三水会紹介文も配布していただきました。ミャンマーの資料に続いて添付します

三水会 2021 年 11 月例会

2021/11/17・Zoom 開催

＜報告レジュメ＞  
「ミャンマー軍事クーデターの行方」

岡本好廣

始めに一世界のクーデターに共通していること

- ・ 特定の地域で頻発している  
南米、東南アジア、アフリカ  
共通するのは多民族、貧困、差別

1. 今回のクーデターの特徴

- ・ 時の動きを止めたクーデター
- ・ 軍の狙いは既得権益の維持にある
- ・ 国連安保理が常任理事国の拒否権で調停できない

2. 3 度目のクーデターで最も深刻な事態

(1) 最初のクーデター

- ・ 1962 年国軍のクーデターでネ・ウイン大将を議長とする「**革命評議会**」が発足、憲法と議会を廃止し、主要な政治家を逮捕・拘禁した。革命評議会は「**ビルマ社会主義計画党**」(BSPP) となり、他の全ての政党が解散させられた。同時に主要産業が国有化された。軍内部で派閥争いが起き、反対派の有力者が解任された。
- ・ 全土で反政府運動が起き、次第に激しさを増して行った。
- ・ 日本は 1955 年から賠償を開始し、1968 年からは「**対ビルマ有償資金供与**」(円借款) を提供した。
- ・ 1974 年 1 月「**ビルマ式社会主義に基づく新憲法**」を公布し、ネ・ウインが大統領に就任し、形式的に民主主義を掲げた。一方国営企業労働者のストライキ、学生の反政府運動が全土で広がった。  
日本は 1968 年に「賠償」を、1975 年「**対ビルマ無償資金供与**」を開始した。

- ・1985年6月、学生・労働者による大規模反政府スト、その後も続く。
- ・1988年3月、学生等による大規模反政府デモ、サンユ大統領辞任、新大統領にサインルウィルが就任して収拾に乗り出したが、収まらずに辞任した。これを契機に市民や公務員も反政府運動、全国的な民主化運動に発展した。

## (2) 2度目のクーデター

- ・軍は1988年に至るまで5回大統領を代えたが、反政府運動は収まらず、9月には民主化運動を封じ込め、ソオマウン大将を議長とする「国家法秩序回復評議会」(SLORC)を設置して元の軍政に戻した。民衆の側は「国民民主連盟」(NLD)を結成し、アウンサウンスーチが書記長に選出された。軍はスーチー氏を4度目の自宅軟禁にした。
- ・1990年複数政党制に基づく30年ぶりの総選挙を実施、多くの干渉を撥ね退けてNLDが圧勝したが、軍は政権を移譲せず議会も招集しなかった。
- ・2010年に軍は自分たちに有利な選挙関連法を公布、これに基づいて総選挙を実施して勝利した。軍事政権は一旦解散し、テインセイン氏を大統領とする民政に移行、スーチー氏も軟禁を解かれ、テインセイン大統領と会談し、協力して新しい国づくりを進めることに同意した。
- ・2012年に「上下両院および地方議会の補欠選挙」を実施し、スーチー氏が実質的に率いるNLDが圧勝し、スーチー氏も下院で当選を果たした。
  - ・こうした民主化の動きを欧米、日米欧の国際社会が歓迎し、それまで中断していた経済援助と首脳交流を再開した。この年テインセイン大統領は日本を訪問して野田総理と会談し、オバマ米大統領は日帰りでミャンマーを訪問した。

## (3) 今回3度目のクーデターの特徴

- ・このようにミャンマーの民主化が順調に進むかと思われていた矢先、今年2月1日に突然3度目のクーデターが起きた。1月に実施された総選挙でNLDが選挙違反をしたというのであるが、実際は軍が選挙結果を恐れて先手を打ってクーデター起こしたのである。軍が主張する選挙違反とは一部の名簿にダブりがあったこと、スーチー氏が無許可で無線機を所有していたことなどである。どちらも些細なこと、選挙で軍が惨敗した結果、政治と経済の権益が奪われること恐れたのである。

#### ① 政治的特権への懸念

2 度目のクーデター後の 2008 年、軍は憲法で次のような特権を手にした。

- ・国軍総司令官は連邦議会と州・管区議会の議員の 25% を指名できる。
- ・閣僚のうち内務、国防、国境担当の三大臣を任命し、内務省は警察を統括する。
- ・国軍総司令官は非常事態の際に大統領から全権の移譲を受けることができる。
- ・連邦議会議員の 4 分の 1 は軍に依って最初から決まっており、国軍司令官が事実上大統領の上に君臨していて、シビリアンコントロールが効かない。

#### ② 経済的特権への懸念

軍は 2 つの独占的企業体を保有し、そこから上がる利益を独占している。

(ア) ミャンマー・エコノミック・ホールディングス (MEHL)

(イ) ミャンマー・エコノミック・コーポレーション (MEC)

- ・2 社は併せて 106 の子会社と 27 の関連会社を傘下に持っている。業種は農林水産業、建設、不動産、宝石・鉱物採掘、金融、保険、各種製造業、商業、貿易、電気、ガス、輸送、旅行、ホテルからサッカークラブまでのあらゆる業種に及んでいる。
- ・ミャンマー最大のコングロマリットであり、独占企業である。
- ・MEHL の会長は今回のクーデターを主導し、大統領権限を手にしたミンアウンフライン国軍最高司令官、ソーウィン副司令官が副会長である。
- ・この他役員には国軍最高幹部 7 人が入り、利権を共有している。
- ・MEC は国防省が運営していて、グループを束ねる本社機能には現役の国軍幹部らが取締役として名を連ねているという。
- ・今回の総選挙はスーチー氏が率いる NLD が圧勝したので 4 分の 1 の軍優先枠があっても票決で負け、いずれこうした政治特権と軍の 2 つのコングロマリットを失う恐れがある。そうならない内に軍政に戻した方が安心だと考えて 3 度目のクーデターに打って出たのではないかと推測される。

#### 4. 解決には国内の闘いと国際的な支援が必要

- ・国内では当初から学生、労働者、公務員、一般市民が立ち上がり、デモや軍や行政に対する不服従運動を推し進め、死傷者が出ても屈せず闘っている。

民主派がつくる「連邦議会代表委員会」(CRPH)は4月に文民政府「国民統一政府」の発足を内外に宣言し、大統領以下の人事も発表した。少数民族の大多数もこれを支持している。アウンサウンスーチ氏は引き続き国家顧問に就任する。

国連大使として家族とともにニューヨークに駐在していたチャーモートウン氏は大使を続けるとの声明を出し、多くの国の支持を受けて国軍批判を続けている。

国民の抵抗とサボタージュでミャンマーの経済はマヒ状態に追い込まれている。

## 5. 国際機関の対応への期待

国連安全保障理事会の事態可決ための動きは内政に干渉すべきでないとする中・ロ両国の反対で立ち往生している。

① 中国はミャンマーに多くの利権をもっており、更に拡大しようとしている。

・1月17、18日に習近平国家主席が国家主席として19年ぶりにミャンマーを訪問して、西部の深海港や経済特区開発について協議し、両政府の合意を発表した。中国が「一対一路」構想を進める上で2千キロに及ぶ国境を接するミャンマーは極めて重要な国であり、経済援助や借款を通じて特別な関係を結びたいという意向があり、それが実現したようである。この時に署名した大統領はその後のクーデターで拘禁されたが、国家間の契約は有効でそのまま実行に移されている。

② ロシアはミャンマーへの最大の武器輸出国であり、双方の利害が一致している。

特にロシアはクーデターに反対している欧米に対して、国連の場で中国と共に反撃できるチャンスを得たことになり、国連の場での解決は難しい。

③ 東南アジア諸国連合 (ASEAN)

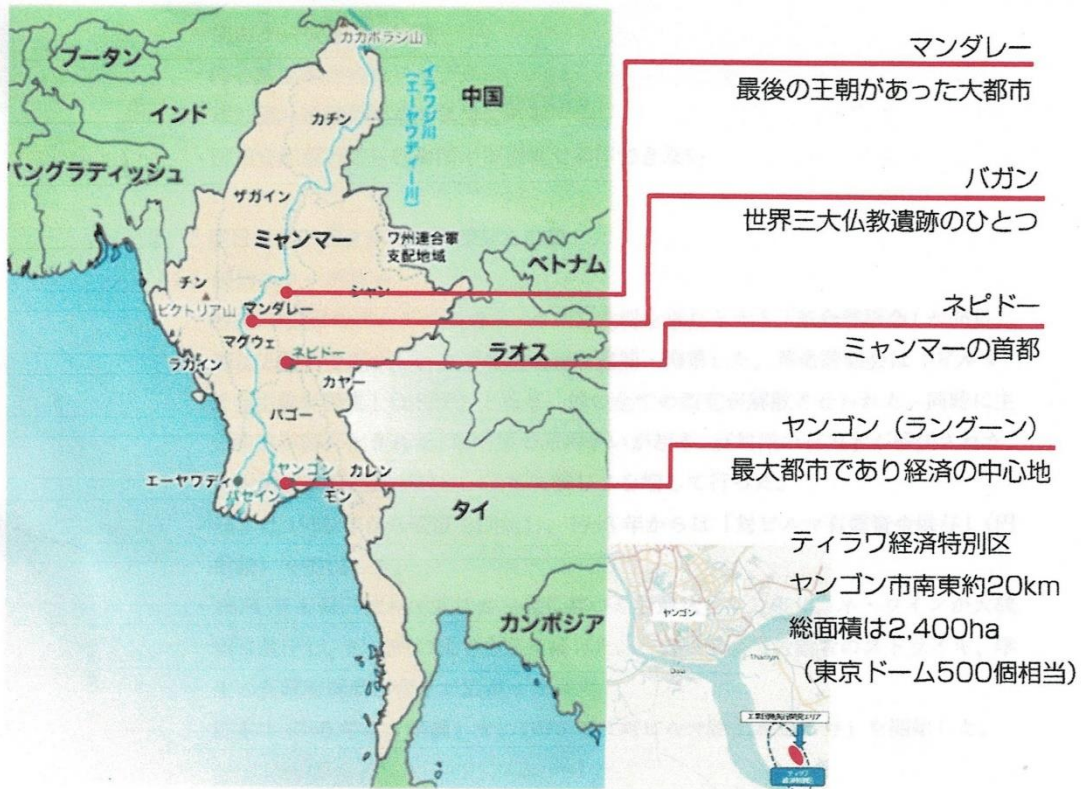
ASEANはタイ、ミャンマー、インドネシア、ベトナム、ラオス、シンガポール、ブルネイ、マレーシア、カンボジア10国が加わる東南アジア地域の交流、連帯機関である。伝統的に加盟国の国内問題には干渉しないという立場をとってきた。ミャンマー問題についてもその姿勢は崩していないが、国による濃淡はある。

## ミャンマーについて

130以上の少数民族が住む多民族国家ミャンマーは就業者の半分以上が農業に従事し、GDPの約60%を農業生産高が占める典型的な農業国です。

国民の殆どが仏教文化の中で育っている為、「目上の人に対する尊敬心」や「道徳心」を持ち、また「温和で争い事を好まない」と言うように日本人に似た気質があります。

日本とミャンマーの間には伝統的に友好関係が存在しており、両国国民の間には、様々なレベルにおいて文化交流が着実に積み重ねられています。



## 「第 500 回三水会」(2021 年 11 月 17 日)

42年目を迎えた「異業種交流研究会・三水会」

岡本好廣

会は偶然の出会いから始まった

前に触れたことがある「異業種交流研究会・三水会」が42年目を迎えた。私は発足当時からの会員で常任幹事を務めているが、この会はあることがきっかけで始まった。1978年に箱根湯本であるコンサルタント団体が主催した「長期計画策定セミナー」に参加したところ、仮の企業を創業して10年間の長期計画を策定する作業が課せられた。1チーム8人で3日間取り組み、4日目にできた計画を発表した。この時のチームメートが住友海上火災保険(株)企画課長前田僕介氏である。当時私は全国の生協の経営指導を担当していた。前田さんの経営企画と私の経営指導の仕事が長期計画策定にマッチして最優秀賞に選ばれた。帰りのロマンスカーの中で、前田さんからこれを契機に「異業種交流研究会」を発足させませんかと云われた。その時は仕事が忙しいからと生返事をしたが、案を作って他の企業の友人も誘いますとのことであった。2週間程経って連絡があり、他社の企画部仲間に話を持ち掛けたところ面白い、やろうということになったとのことである。次のような企画が示された。

- ・年間日程を決めて毎月1回夜に行い、少人数でも実施すること。
- ・テーマは自由で、「会則、会費、会長なし」の会にすること。
- ・研究発表と案内・会計を会員が分担して進めること。

いろいろな企業に勤めている友人に声をかけて参加を取りつけた熱意に断れなくなった。前田さんは大阪大学の出身で、同期や後輩で在京の企業に勤務している人に呼びかけたのである。私も友人、知人を誘って参加することにした。毎月第3水曜日に開催するので<三水会>と名付け、1979年4月18日に新宿西口の住友ビルで設立の集いをもった。集まったのは30人程だったと思う。金融、保険、商社、重工業、電機、化学、シンクタンク、マスコミ、協同組合、大学等に所属する人たちが代表的な企業・団体が揃っていた。発足当時は中堅であった会員が年齢とともに幹部になり、役員になって現在に至って



る。残念なことに発会后10年もたたない時期に前田さんは癌で亡くなられた。しかし阪大の仲間が努力され、更に京大、神戸大、九大と仲間を増やされたので、今でも会員は西日本の大学出身者が多い。最初は会場の確保に苦労したが、神保町の学士会館会議室を確保することで解決した。しかし毎月名古屋と掛川から新幹線で来られる会員から東京駅に遠いので困ると云われた。会員の元朝日新聞編集委員岩垂弘さんが内幸町の日本記者クラブ小会議室にしたらと紹介して下さり、以後日本プレスセンターの9階にある会議室を使わせて戴いている。交通が便利な上に館内に大きな書店があり、資料、コピー機等も完備している。夕食懇親には10階の高級レストランを安く利用させて貰えるので有難い。ロバート・オウエン協会では私と岩垂さんの他中川会長、今尾和実さん、斉藤嘉璋さんが会員である。発会后40年以上経って会員の平均年齢は80歳を超えた。途中から加わった人がいる一方で物故者も少なからず出ている。2012年4月に共同通信文化部がこのように長続きしている会は珍しいということで、例会を取材して全国に配信し、かなりの数の地方紙が記事を掲載した。「知的刺激で人生豊かに 33年続く異業種勉強会」というのが共通のタイトルであった。早いものでそれから既に10年近く経っている。

昨年コロナで休会中に「三水会 例会目録年表」を作成した。1979年から2020年の記録である。年度毎に国際、国内の政治・経済・社会の動きが示されているので、こういう時代背景のもとでテーマが選ばれたのが判る。作成されたのは私とともに常任幹事を務める野口幹夫氏（元東芝総合企画部長、関連会社常勤監査役）である。年表をもとに研究会が42年間に取り上げたテーマを系統別に示し、併せて締めくくりの全員討論と視察、忘年会を含めて合計496回の概要を紹介する。

---

2021年度はコロナに見舞われて半年間休止に追い込まれ、7月からZoomで再開を果たした。これによって11月例会が500回目になり、私の報告が榮譽に浴した。私は最初から三水会の企画に参加した生き残りである。三水会を記録に残したいと思い、理事を務めるロバート・オウエン協会の『2020年度年報』で紹介した。「第500回三水会」（2021年11月17日）とタイトルを新たに、転載することにする。



## 例会目録にみる42年間の歩み

### <例会テーマの分類とそれぞれの特徴>

	テーマ	数	%	テーマ別の内容と特徴
1	産業と科学	62	0.13	科学全般の専門的解説、国内外の産業実務等広範囲に及ぶ。
2	国際問題	60	0.12	先進国から途上国ミャンマー、ベネズエラ等広範囲に及ぶ。
3	人生観・教育	60	0.12	ここでの問題が後に実施した全員討論の素材を提供した。
4	政治・経済	60	0.12	外部講師の登場が多い。同上、後に討論で深め合った。
5	哲学・宗教	53	0.11	ベルグソンの系統的研究、グラムシ、ポランニーも対象に。
6	社会問題	52	0.11	政治・経済と重複するが、格差問題等を重点に検討した。
7	企業・経営	44	0.09	日本企業の問題点を分析し、改革の方向を示唆した。
8	歴史その他	42	0.08	縄文・弥生、大和と続く時代を「日本原記」として研究
9	文化・芸術	35	0.07	「村上春樹と多和田葉子の文学」等多岐に及んだ。
10	協同組合	28	0.05	農協、生協全国連の会員が2割程度おり、当初は報告した。
計		496	100	

例会の中心は会員とゲストの研究報告であるが、適宜種々の催しへ参加、施設の見学を実施した。討論は時には宿泊して行った。研究報告は会員が約8割、外部講師の話が2割の割合である。毎年11月に3時間かけて実施する<全員討論>の最近3年間のテーマは次の通りである。

「今という時代について」

「世界経済と日本の立ち位置」

「日本社会が分断に陥る危険はないか」

忘年会は昨年コロナで中止した以外は会員の推薦により毎年会場を替えて実施してきた。冒頭会員のエコノミストから翌年の経済展望を伺って乾杯し、会食・懇談に移る。2005年日比谷シーボニア・メンバーズクラブでの忘年会には宇宙飛行士野口聡一さんが特別参加された。常任幹事野口さんのご子息で、近くの会場で講演の後出席されたのである。昨年11月18日には3度目の飛行を実施して4月まで国際宇宙ステーションに滞在される。野口常任幹事はヒュ

ーストンへ見送りに行かれたので、全員討論の問題提起と進行は私が行った。三水会は忘年会の他会員の叙勲祝い等の催しを実施してきた。古稀、喜寿、米寿等のお祝いもした。

### 会員の献身的な例会への参加

発会后間もなく入会された会員に富士フィルムの専務が居られた。会場がなくて困っていた時は社長を兼務されていた銀座にある子会社の会議室をお貸し戴いた。インスタントカメラ「写ルンです」を成功させ、ブームを起こした方である。退任後は学士会館の例会に毎回出席戴いた。不幸なことに次第に視力を失われ、杖を突いて奥様が介添えされてお出でになった。奥様は2時間以上も廊下の椅子でお待ちになった。目が悪いので報告をその都度テープレコーダーで録音され、後で聴き直されるというのには頭が下がった。感謝の気持ちをお伝えしようと2015年10月お宅に近い料理屋で昼食会を催した。大層喜んで戴き、35年間に及んだ三水会の思い出をお話願った。その後内臓の病気に罹られ2年後に亡くなられた。富士フィルムの次の専務も会員になられた。アメリカの営業責任者をされた方で激しく展開されたコダックとの商戦について報告されるなど、経営最前線の興味あるお話を伺った。その後コダックは経営不振に陥って事業を停止、国内国際市場とも富士フィルムの独壇場になったが、フィルム市場にも大変動が起きた。これも事業転換で乗り切り、映像・印刷関連、記録メディア、医療診断装置、医薬品へと事業分野を拡大された貴重なお話もお聴きすることができた。会員には他にも大企業の一線で活躍された方が居られ、この方々の報告は有益なものであった。

<三水会 例会目録年表>を纏められた野口常任幹事は次のように云っておられる。

#### 「三水会とはこんな研究会」

1997年4月に異業種交流会として発足して40年続いているという

驚くべき自由な研究会です。

その長寿の理由は何でしょうか。

互いに敬意をもてる人生の持ち主たちに毎月会える楽しみ

話すのが楽しい。聞いて面白い。聞いて自由な論議をするのが楽しい。

1年かけて聴いてくれる仲間に話せることを掘り出し纏めることは、  
何よりも人生の楽しみだ。

私も「三水会で得たこと」を付言する。

常に皆さんから「知的な刺激」を受け、「広い世界」へ誘って戴いている。同じ場所だけで過ごしてきた者同士では味わえない貴重なことである。異業種は別世界である。私のように視野が狭く、自己中心の価値観で生きてきた者には驚きの連続であり、広い世間を知った思いであった。われわれは「少数派」であって、周りは「多数派」である。卑下することはないが、特殊性を強調する余り孤立してはならない。良くも悪くも「常識」が社会を律しており、そこから出発することの大切さを学んだ。三水会はそれらを学ぶ学校であった。会を企画した前田さんが「3か月に1度や隔月でなく毎月やろう」と云ったわけが判った。三水会を生活の一部に位置づけて毎月開催することが継続につながった。研究報告のレベルが高く、聴かなければ損という内容であることも大きい。一気にこの領域に到達したのではなく、年に1度の報告を楽しみに各自が研究を続けたことがこうした結果につながった。

コロナのために昨年は例会が3回も休会に追い込まれた。41年間で始めてのことである。2021年の計画では1月20日に富沢賢治先生をゲストにお迎えして、昨年の最終国会で成立した「労働者協同組合」のお話をお聴きする予定であった。それが「緊急事態宣言」で延期になり、次の日程も決められない。しかし何としても三水会を継続し、あと4回で節目となる500回の例会を迎えるのが会員一同の切なる願いである。